

2016年が始まった。とはいえ昨日となにごともひとつも変わりはない。夜までなんとなく絵を描いていた、壁にかかった絵、もうできあがったということでサインと日付を入れたが、なんとなく気に入らないところが目についた、どうしようかと迷い考えた、「ひと筆入れて つぶれるか そのまますんなり成功するか」こういうことはいつもあること「90%は失敗に終わる」という危険な作業、迷い考え逡巡するわが薄くかよわい脳細胞が衰れではあるが・・・などと能書きをいいつつ絵の具を出した。案の定という言葉どおり、確立どおりどうもよくはならない、素晴らしい絵には変身しない、ガハクをして喜悦の顔にさせしめないという結果。元に戻すことはできないのでまたしばらくは描き続けなくてはいけない、というむしろ楽しい作業が控えている。元に戻すという作業はコンピューターグラフィックでは簡単に戻る、5回以前や10回以前の作業に戻れるが、手仕事の場合それは不可能、絵はそれはできない。

夜遅くに娘の友人が二人来てみんなでちょっといっぱいということになった。先日来ウイスキーを安くわけてもらい10本も一度に我が家にやってきた。半分ぐらいを皆さんにおすそわけ、だがまだまだある。「ハイボールの旨い飲み方」とMさんがさかんにいう。「ウイスキーを冷凍庫に入れる まともなウイスキーなら凍らない ソーダも冷やすこのふたつをまぜると旨いハイボールできます」どこかのバーの秘伝の飲み方だそう、常連客にも教えなかったそうだが、いつの日かTVで有名になったとか。とにかくこの飲み方は今や我が家でもおおはやり、ソーダを飲みきらないもったいないのでひとりの時はこれは飲まない。今日は5人も飲むということで大きなソーダの瓶を開け一杯二杯とまずはひとりで飲んで、みやげに“デンキブラン”もいただいた。浅草界隈に住んでいる彼が「これを飲んで知らないでしょう」と名前を聞き「おお 知っているよ」どなたにもらったのか忘れてしまったが、吉谷君あたりがどこかで手に入れたものかもしれない。箱書きに、古きよき時代の浅草にあった“バー”で造られたカクテルだそう。ブランデーがベースで、当時、電気はハイカラの象徴だったそうで“電気ブランデー”が後々“デンキブラン”に落ち着いて今もなおそのバーともどもあるということらしい。当時は今をときめく芸能人・文壇人がこれを愛でたそう。「葉くさいね」と若い連中の弁。

飯を食っているので腹は大きい、アテを軽く食い、日本酒も飲んだ。そばを少し食い、黒豆を圧力鍋で焚き、田作りを炒った。「旨い もうねるね ごゆっくり」とばたんきゅう。

6時に目覚めた。いささか飲んだようで、身体が重い。いつものように食パンを食い、コーヒーを飲み、洗濯をして干した。10時ころいすに座ってぼおとしていた、外を見ていた、陽が照っている、珍しい光景ではないが、陽が暖かく照っている、これは冬の日のご馳走だ。「飲みすぎで身体がだるいネエ」と思いながらガラスの外を見てみると、洗濯物から湯気が出ている、かすかに目を凝らさないと見えないが、ほわり白い煙が上がっている。「洗濯物は こういうぐあいに 乾くのか」わかりきったことを再発見、ぼおとなにも考えずたたずんでいると、妙なもの、ひよっとすると宝物を見つけるかもしれないねえ。

メモに“不条理”生きている意義を見出せない 限界的状況 絶望的状況 シジフォスノ神話 とかいてある。オレはいう 「人間の生き様は 殺す殺されるでないなら シジフォスノ神話 状態を楽しむ これが人生じゃ」山尾三省の話に拍手：<世界を不条理という視線から見るとは、生命に与えられる小さな喜びの相から見ていくなれば、大岩を担ぎ上げて登っていくという行為そのものが、喜びのためのひとつの労働として転換されてきます。それはまったく百八十度変わってくるわけですね。同じ労働でありながら、心のありようを変えただけで無意味性から喜びへと逆の方向に転換することが出来るんですね>

シジフォスノ神話に登場する罪人は、罰として石ころを積み上げる日々を送る、これが罰なら「悔しい 王族のオレが こんな労働を 意味のない労働を」悲嘆にくれ、世の無情を恨むのか。「殺されなくてよかった 労働さえすれば 飯が食える 景色が見える 空が見える」というように、心晴々、命の喜びを謳歌するのか、ヒトの考え方思い方はさまざま。

いつもいうように、ヒトの諍いは“パワー・人種・宗教”がほとんど原因だ。このみつつのなにかを。奪う、犯す、否認すると諍いが起こる。「みざるいわざるきかざる」をつらぬくか、自分の頭をもたげるか、どうする。

丸谷才一著<鍋の底を眺めながら>エッセイを読み、おせち料理を思いだした。先日友人が見せてくれたおせちの写真、いくつかの皿の上に小ぶりの鯛、寿と焼印が押された卵焼き、かまぼこ、煮物がどっさり並んでいる。煮物は彼女の手造りかと思うが、鯛の焼き物、卵焼きはお店で買ったものだろうか。数年前、63歳ぐらいで亡くなったI先生が「大晦日に車出してくれるか」「いいよ」「鯛を注文している 大晦日に焼きあがるから それを取りにいきたい 単車じゃ危ないから」「いいよ」「目の下一尺」以上ありそうな立派な鯛が4.5匹もあった。「ひとつもらっていい」とどうもオレにしてくれるためにわざわざ車で運ばしたようで、照れ屋の彼らしいとあとから思った、ごとうさま。今まで正月に焼いた鯛を食べたことがなかった「冷めた鯛なんて」ぐらいに考えていたが、正月に箸をいれて一切れつまむと「ほお～ 旨い」と思わず声がでた。いまだきTVの画面、どこで見ても、だれかがなにかを食っている「これはどこの何をどのように料理した」「こちらはごくシンプルな素材の味を・・・」というような解説付きで画面の前の美男美女が旨そうな料理をぱくついている。昨今は旨いのがあたりまえ、おいしいものを食うために努力するのがあたりまえ、という飽食の時代、オレのように「食えればいい」「どれもおいしい」「贅沢はいけない」なんて時代ではないのだとしみじみ思う。両親が美食を好んでいたら、母親が料理上手なら、父親が酒好きなら家庭の食卓も変わっていたかもしれないが、酒のない食卓はそそくさと、おかず・ご飯・汁物と食べ終わるのが早かった。母親が魚嫌いだった、塩鮭、さんまやさばの焼き物は焦げるぐらいまで焼かれていた「これぐらい焼くと魚くさくない」とよく聞かされた。二十歳ぐらいまで魚が旨い、こんなに旨いものかということを知らなかった。当然正月に焼いた鯛を食うことはなかった。山盛りあった数の子、イモサラダ、大根と人参のナムス、卵焼きというような当時ではハイカラ部類に入る料理も並んでいた。数の子は食えなかった「こんなもの どこがうまい」日本酒も一口なめて「げえ～」というようなこどもだった。近所の小さい子がチーズをかじっているのを見て「セッケンのようなものを よくも食う」とあきれていた。

先日なくなったYは子供のころからの酒好きだったようなことを言っていた。知り合ったのが二十歳前だったが、旨いといいつつ酒を飲み、「酒にはこれを食う これはだめ」と講釈もなかなかのものだった。そんな彼と何度も居酒屋に行き、何時間もおしゃべりを聞かされたが、旨いものも教えてもらった。魚の生も、焼き物も、煮物も、彼がすすめてくれたものは全部旨かった。父親同様に酒が飲めなかったオレが、飲めるようになり、つよいだの、酒飲みだなど言われるようになっていった。今から考えると、無駄に大飯を食らい、大酒を飲み、くだらんことをしてきたものだと罵られそう。若いころは肉も魚も、脂ぎったところが好きだった。ステーキは手が出なかった、焼肉なら食えた、焼肉を網で焼いて、甘いソースで食べるのが旨かった。焼肉にはビールがいい、といって何本も瓶を空けた。中年のころは魚が旨かった、刺身が最高に好きだった。魚の食べ方も上手かった。かじれる骨は残さずに食った、骨だけが皿に残っていた。そんなに好きだった刺身も、今はさほど食いたいとは思わない、「どこそこの なにが食いたい」「死ぬまでに もう一度 あれが味わえたら」というようなセリフをよく聞くが、オレにはそういうものはない。「今は菜をきざみ 食えればいい ご飯とパンがあればいい 肉や魚もあれば食う なければならないでそれでよし」というような仙人とまではいかないが、そういうようなことを常々いっている、それらを食って満足している、身体もいたって元気だ。

江戸時代のグルメ話：江戸後期の文人、間叟（かんそう）が御徒の職を辞し、一年ばかり出雲崎の豪家宅に在って、同地の事情を江戸の文人仲間に報告したもの。間叟が出雲崎滞在中によく遊んだ妓楼は中華楼といひ、中国趣味で貫かれた凝った店で、料理もしやれていた。<◎鮮魚の風味は東都の人は知らぬ也。海浜に居る事一年、終に江戸の腐魚の味を忘れたり。魚肉は背より腹のうまきもの也。故に浜辺にては上客へは必ず腹の肉をすすむ。また鯛の刺身至て美也。これにて江戸の腐物なる知るべし。◎九月廿九日（29）、初鱈あがりたり。値も貴し。一尾五十銭四十五六文位也（平生は二尾八十九文也）雪降れば鱈のとれる期なり。雪魚いふもむべなる事也。海上十四五里も洋にてとれるもの也。其釣なはへ大蟹かならずついてあがる。此蟹の足至て美也。足の長さ二尺余あり。◎越は野猪なし。鹿麁？はおびただし。深山雪積るにしたがひて皆海辺の山へ来る也。九月十四日、雌鹿一頭もらひたり。間叟自ら包丁をとりてこれを製し、飽くまで食たり。九月廿九日、又雌鹿一頭もらひたり。魚肉にとめる国ゆえ獣肉を食うものなし。獵師（かりゅうど）三人、我かねて心やすくして居たり。野味を贈りくれよと言ひおきし故也。皮は彼にとらせけり。

丸谷先生の話：久しぶりすき焼きでも、と思ひつくと心がはずむ。切り落とし肉 130 グラムが一食分にちょうどいい。切り落とし肉、これはいわゆるすき焼き用の牛肉と違い歯ごたえがある。すき焼き肉は薄くて、食べたような気がしない。大切なのは割り下である。自分で出汁をとって作ればいいのだが、それは面倒くさい。ところが市販の割り下はみな感心しない。味がくどい。手製もどうも一味違う。吉兆の割り下と比べて格段の差があるのだ。東京吉兆の内儀さんからいただいた割り下が少し残っている。早速、シラタキだの焼き豆腐だのを買いに行く。たとえば魯山人ふうのすき焼などといふ名品はまるで違う。いたってぎっけない食べ方です。

魯山人ふうのすき焼き：鍋に牛の脂をなぞって、よく脂を出してから、牛肉を入れて焼き、酒を入れ、味醂ごくわずか、醤油で味をつけ、それから肉をきれいに食べる。それから少し出汁を足して、葱、春菊、しらたき、豆腐、椎茸などを入れて味をつけ、これをきれいに片づける。次にまた肉を入れて焼く。これの繰り返しなのである。急所は肉を煮込みすぎて堅くなる心配がない、春菊も煮込みすぎない。魯山人は一般に「砂糖は食材の味を殺す」「肉の両面を焼くべからず、かならず片面を焼き、半熟の表面が桃色の肉の色をしているまま、食べること」「豆腐、葱、蒟蒻など一緒にゴツ煮するのは、書生食いでよくない」というのが持論。魯山人ふうのすき焼きは、原則として、卵は使わない。大根おろしで食べる。

魯山人語録<京都では飯の炊き方がうるさい連中はクヌギ薪を用いる、火力の具合が非常にいい、松薪はヤニの多いものだから火力が一気に上がるし、煤煙もきつくて飯を炊くのにもむかない><鯛の話。京都人は食通だがケチだ。主人が食道楽の場合、一人うまいものを口にする癖があるそうだ。鯛の目玉と脇腹一寸四方を注文する。魯山人いうには、さらに鯛のうまいところは肝と白子と言い添える>

福沢諭吉：すき焼きといふのは幕末維新の書生料理。慶応四年に、上野彰義隊を撃つ砲音を聞きながら、自分たちが学問に励むことができるのに感謝、なんてことを言って、塾生たちと一杯やった。福沢諭吉は呑平であった。

ガハクの話：すき焼きは子供のころから我が家の大ご馳走だった。丸谷先生ではないけれど「今晚はすき焼き」と母親から聞かされると、弟ともども大いに喜んで待ち構えた。大ご馳走がゆえにそうは何度も食えなかった、今と違って肉が高価だった、野菜も買っていたけれど、肉に比べると安いものだったと思う。当時、肉は高いもの、高価なもの、贅沢なもの、というのは大人の話だけれど、だれもがいていたから違いはないでしょう。我が家のばあい「書生食い」といわれると恥ずかしいかぎりだけれど、ぶ厚い鉄の鍋を七輪にかける。ジワリと鍋が熱くなってきたころあいを見計らって、竹の皮に包まれた肉をだし、肉の上に乗っている白い牛の脂を箸で鍋にこすりつけると、ジワリと融け、鍋の底が光る。まずは白菜、葱、糸こんにゃくなどを入れ、その上に薄く切った肉を並べる。白い砂糖をさじでふりかけ、まんべんなく醤油をふりかける。ぐつぐつ煮たってくると「さあ食べていいよ」と父の声。深皿に生卵をわってぐるぐるかき混ぜ、まずは肉、また肉と箸をのぼすも「肉ばかり食ってはいかん」と声かとび、しゅしゅ野菜を、蒟蒻をも食べていた。鍋の中が無くなりかけては、野菜を蒟蒻を、その上に肉を並べ、砂糖、醤油と練りかえす。最後にうどんを入れ、ぐつぐつ炊いて食べた。そのうどんの旨かったこと。今もすき焼きは好きである。

大人になって、“魯山人ふうのすき焼き”とは知らなかったが、「これが旨い食い方 ほんとうのすき焼き」と物知りから教わり試してみたこともあるが、やはり子供のころからの書生食いが、オレにはあっているようだ。“割り下”というものは大人になってはじめて聞いたが、使ったことがない、関東のものだろうぐらいに思っている。

「割り下」とは、だし汁に、醤油、砂糖、味醂、酒、など調味料を入れ煮立てた汁のこと。関東風すき焼きは、鍋に割り下（醤油・砂糖・酒などを混ぜた汁）を入れ、そこに肉や野菜などを入れて一緒に「煮る」調理法が主流。一方関西風すき焼きは、鍋を熱して牛脂を入れ、牛肉を入れて焼く。肉に醤油や砂糖を入れ味付けしてからを入れるという「焼く」調理法が一般的。関東大震災までは関東では「牛鍋」と呼ばれていたが、今は全国的にすき焼きと呼ばれている。

図書館で雨月物語と伊勢物語を借りました。お恥ずかしい話ですが雨月物語を知りませんでした、「伊勢物語と同時代 同系統の本かな 名前は聞いたことがあるが とにかく読んでみよう」ぐらいの気持ちで借りてきました。もちろん現代語訳がされている、パラパラめくって「え 面白そう」とページをくった。雨月物語は江戸後期(1776年 今から250年ぐらい前)、上田秋成作の読み本、今で言う小説らしい。ガハクのひとり言：ド素人がのたまうに、今昔物語なんかと同じように、中国大陸のにおいがする、日本人にはない発想、考え、顛末、またこのような形、小説という言葉で連想させる文章の構成、中身の構成、いやはや感動。浅茅が宿(あさじ)という一遍を紹介しますが、有名な映画雨月物語もこの遍から脚色しているらしい。画像を見ると、こどものころに見た懐かしい銀幕スターの顔ぶれ、京マチ子がなんと艶っぽいことか。地名にも懐かしい思い出がある。下総の国、葛飾郡真間の里、現在は千葉県市川市、若い頃によく知っている地名だ。不満は、話の最後に真間の手児女が出演するが、唐突でこの演出はいただけません。

江戸時代後期に書かれた読み物。享徳4年1456年の時代設定。

下総の国、葛飾郡真間の里に、勝四郎という男がいた。豊かな農民の子だったが、怠け者で、家が傾きかけてきた。どうにかして、家を建て直そう思い巡らしていたとき、京から絹を買い付けに来ていた雀部(ささべ)という男と懇意になり「京にいきたい 一旗上げたい」と頼むと快く了承してくれた。勝四郎は田畑を売り、白絹を買い込んで準備をした。勝四郎の妻宮木は美貌で賢い女だった。勝四郎が京に行くことには反対だったが、仕方なく、かいがいしく、出立の準備を手伝った。出立の前夜はしみじみと抱きあい、語りあい、「秋には帰ってくる」という言葉を残して出立した。時に鎌倉の管領足利氏と上杉氏の争いは始まり、関東一帯は大混乱に陥ちいった。若者は兵士に駆りだされ、老人、女、子供は逃げ回った。勝四郎の妻宮木は「秋には帰ってくる」という言葉を信じ、家に引きこもって待った。

身のうさは 人しも告げし あふ坂の タづけ鳥よ 秋も暮れぬと

(逢坂の鳥よ もう秋は暮れてしまった と夫に伝えてください)

宮木のまわりには、容姿端麗を狙った数々の誘惑、戦乱は続き放火、略奪が横行していた。一方、勝四郎は雀部について京に入り、白絹を売って大金を稼いだ。いざ帰ろうと出立したが、木曾で盗賊にであい身ぐるみはがされた。関東周辺は焼け野原というよううわさ、関所ができ通行不可ということを知り、近江に舞い戻ってきたが熱病にかかってしまった。雀部の妻の実家に助けを求めると、快く迎えてくれ、親切に介抱し、医者や薬の面倒を見てくれた。身体は元に戻り、生まれつき素直で正直な性格が愛され、みんなと親しくしているうちに七年の歳月が過ぎてしまった。勝四郎はよくよく考た。遠い国にとどまり、みなさんの恩恵を受け、故郷に棄てた宮木の消息さえ知らぬまま、生きながらえるべきかと。たとえ生きていなくても、妻の供養をしようと決心し、周囲にその意思を告げ故郷に帰りついた。田畑は荒れ放題、道もなく、橋もなく、我が家を探し回ったがわからず、途方にくれていたが、見覚えのある松ノ木を見つけ近づくと、我が家がみつきり、すき間から灯火が漏れていた。「帰ってきたよ」垢にまみれた宮木が現れた。お互いに今までの身の上を話、慰め、ともに枕についた。勝四郎は目を覚ますと、あばら家の板の上に寝ていた、隣にいたはずの宮木の姿はない。呆然としながら「妖怪が化けてでたのか」「自分を慕うなき妻の亡霊がでたのか」

さりとも 思ふ心は はかられて 世にもけふまで いける命か

(もしかしたら帰ってくるかも 思う心にだまされ 生き延びた命が惜しい)

勝四郎は宮木の歌で妻の死をさとった。妻の最後を知っている漆間の翁を探し当てた。「勝四郎 なんてこんなに遅れて帰ってきた」勝四郎は昨夜のできごとを翁に語った。翁は勝四郎に、宮木が勝四郎の帰りを待って気丈に家を離れなかったこと、五年前に亡くなったこと、翁が家の中に棺を埋め塚を作ったことなどを語った。二人で塚に行き、念仏を唱え朝まで過ごした。最後に翁は、勝四郎に語った。

大昔、ここに、真間の手児女という美しい娘がいた。家は貧しいが美しい娘で、里の人はもとより、都の防人、隣国の人まで、いいより、恋惚ばないものはいなかった。手児女はそれをつらく心苦しいことと思ひ、いっそ死ぬことによって多くの人の心に報いようと、入り江の浦の波に身を投じた。宮木さんの心は、手児女と比べても、どれほどまさって悲しかったことだろう。

以前から一度行ってみたいと思っていた、想像していたよりは立派すぎる建物、日曜日なのに人影はない、正面の大きなガラスドア付近は薄暗い「まさか せっかく来たのに 休館じゃないだろうね」と近づくと中に灯りが見える、人影が見える、風除け室におかれた自動販売機で500円の入場券を買い中にすすんだ。2階の入口を入るといきなり音声が届いた、とつとつと訴える声に聞きほれた。阪本清一郎という人の回想録らしい。

「私は始めて穢多と云う語を覚へ 自分は穢多に生まれたと云うことは 丁度七八才の小学校入学してから間もない時であった 一般(外村)の上級生からは云う迄でもなく 信頼している先生さえも 差別の目を以ていた 学校から帰ると常に母に質した 穢多ということはどんな事か なぜ私らの者文けがキラワレタリ 井ジメラレタリスルのか それは自分らの先祖は穢多であったからだ 皆因縁事だ 勉強さえしてエラクなったら そんな事はなくなるのであると 常ニ涙ながらにきかされた 子供の私には この因縁と云う事はどんなことであるのか 全々解せなかった」

水平社の住所は御所市柏原。橿原市の橿原神宮まで数キロしかない。石舞台や高松塚古墳で有名な明日香も隣町。初めて人権バスツアーで連れて行ってもらった橿原市立大久保まちづくり館も、橿原考古学研究所博物館も近い、これは今地図を見てびっくり、このあたりは歴史の宝庫、ガハク感動の辺りなり。三輪山が出てくる、藤原京が出てくる、大和三山：畝傍・香久・耳成(みみなし)がでてくる、きりがいいねえ。水平社の説明の中で、この地は川が流れていたの、廃牛馬の解体に便利だった。近隣の場所から死んだ牛馬が集まり、このあたりの河原で解体して、皮に、肉に、骨に仕分けした。皮は武器や衣服の高級材料に、肉を食わない日本人だったが、薬食いと称して日本の皆さん旨く食っていたのかもしれない。骨はニカワになったらしい。ニカワと聞けば、日本画を描く皆さんが絵の具に混ぜ今でもおおいに使っている。書をかき墨も煤とニカワを混ぜて作るもの、これもおおいに知っていた。一昔前まではフィルム、マッチなどもニカワで作られていたらしい。ということで、この村は裕福な家がいくつかあったようだ。ガハクが子供時代、あばら家の一間で、板の上で家族がたくさん暮らす、布団がたたんである、ちゃぶ台がひとつある、そういう友人の家も何軒か知っている。そんなところで暮らしていた、子ども心に、貧乏で辛そうだとも思ったが笑って遊んでいた。同和の村でも、裕福な家、力のある家もあったのだと再認識。そういう家の若者が、学問を見につけ、差別、平等に芽生え、運動を起こしたのがこの場所、それが大正時代だったのだ。その頃の宣言文の一部を紹介します。ただこれ以降時代を経て、若者の純粋なことの始まりから変化し、「お山の大将は俺だ」「おまえの考えは間違っている」「この運動をすることによって、一儲けしてみよう」利権・力・組織が入り乱れけったいなことになり、おかしいことになっていったこともあった。こういう時代のことは知りたくもない、誰が何を言ったかも知りたくもない、汚濁の時代だ。人権ということに関して、オレは静かに、心おだやかに、人と接していきましょうと心がけています。

水平社宣言

全国に散在する吾が特殊部落民よ團決せよ。長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾らの為の運動が、何等の有難い効果を齎(もたら)さなかった事實は、夫等のすべてが吾々によって、又他の人々によって毎に人間を冒瀆されていた罰であったのだ。＜略＞兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渴迎者であり、實行者であった。陋劣(ろうれつ)なる階級政策の犠牲者であり、男らしき産業的殉教者であったのだ。ケモノの皮を剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代償として、暖かい人間の心臓を引き裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪われた夜の悪夢のうちにも、なほ誇りを得る人間の血は、枯れずにあった。そうだ、投げ出す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福されるときが来たのだ。吾々がエタであることを誇りえるときが来たのだ。吾々はかならず卑屈なる言葉と、怯懦なる行為によって、先祖を辱め、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勤(しょう-たちきる)る事がなんであるかをよく知っている吾々は心から人生の熱と光を願求禮讚するものである。

この本、先日の雨月物語と一緒に借りてきた。「どういう本だろう 何が書いてあるのかな」程度の知識しかなかったが、「おお 在原業平・・・」名前ぐらいは知っている。日本の古い文章は、漢文の素養、歌の素養がなければなかなか理解できない。漢文は漢字そのモノの意味、たくさんの意味、それを知らない。歌は「歌を詠んで 気持ちを伝えた」と簡単に云うが、今の感覚で、現代人のわれわれは、しっかり説明をしなくては気持ちが伝わらない、詳しい事情を話さなければ理解されない、歌で心情が伝わってくるのか、などと思ってしまうのは、オレだけか。

伊勢物語の解説で、中村真一郎先生が書いている。古代の文学は作者の書いたままの原文が、そのまま後世の私たちの目の前にあるわけではない。「源氏物語」といっても、あれを紫式部という十一世紀初頭の宮廷女性が書いたものとして、何気なく読んでいますが、実ははじめに紫式部が書いたものは、もっと短いものであって、それが平安朝の終わり頃までに、絶えず他人の手が加わって、生長して行って、現在私たちが見るような姿になっているのです。古代には印刷技術が発明されていなかったため、文学作品は書き写すことで世に広がっていったからなのです。それと近代的な「芸術家の個性」とか「独創性」とかいうものを、何より尊重するという、個人的な芸術観よりも、古代では芸術は愛好者たちの共有財産であるという観念が、支配しておりましたので、書き写す途中で、写す人がもとの作品を、よりよくするために、躊躇することなく手を入れる、ということが珍しくなかったのです。そういう、作品が年とともに生長して行って、もとの形がよくわからなくなっている、というのは、平安朝文学でも古い時期のものほどはなはだしい。とくに「伊勢物語」には、その痕跡がよく残っています。

中村先生が言うように、平安時代のあの有名な作品がそういうことかと驚いている。伊勢物語は読んでみると、誰が書いたのか、どういう本にしたかったのか、作者は誰なのかというように「おかしいネエ どういうことなの」と感じる。主人公は在原業平と決め、いく人かの創作マニアがすきかってに物語をふくらませていった、それを後世のヒトが、オレが読んでいる、ということなのだ。「そらあ つじつま あわんところ あるわな」

筒井筒 めづつにかけし まろがたけ 過ぎにしけらしな 妹見ざるまに

◎幼いころ井戸の囲いで、背比べした私の背も高くなった、あなたと逢わない間に

くらべこし 振分髪も 肩すぎぬ 君ならずして 誰かあぐべき

◎長さを競い合った髪も、もう肩を過ぎるまでになった。あなた以外の誰のために髪を上げましょうか。

この歌はなぜか知っていた、口調を覚えていたが、内容は、井筒という言葉の意味、全体の内容は、今知った。もうひとつこの話の中に、八尾の高安という地名が出てくる。このあたりは、二十歳前の天王寺美術研究所時代に、偶然にも何人かの友人の住まいが高安で、遊びに行ったことが何度かある。また二十歳代後半にはオレ自身、何年か住み、その後、義理の父母が住んでいたため、旧知の場所だ。それともうひとつおもしろい話、娘が中学校時代、国語の授業でこの伊勢物語の筒井筒の項がで、「まさか皆さんの中には、こんなに下品な女がいる 高安に 縁のある人は いないでしょうが」という先生の話聞き、下を向いていたという笑い話まであった。

内容は、幼馴染の男女が、お互いに想いあい結ばれたが、時を経て、男に河内の国の高安郡に新しく行き通う女ができてしまった。妻がいやな顔もせず男を送り出してくれるから、男は、妻に他の男があるのではと河内へ行ったふりをして庭にかくれていた。妻は美しく化粧をして歌を詠んだ。

風吹けば 沖つ白浪 たつた山 夜半（よは）にや君が ひとりこゆらむ

◎夫がひとりで、立田山を越えていくだろう 事故のないように

これを聞き、男は妻へのいとしさをまし、高安へは行かなくなった。普通はこれで終わるのだが、男たまには高安に行ったようである。高安の女、はじめこそ奥ゆかしい身づくろいだったが、今は一人で飯を盛り食べているのをみて、男は愛想をつかした。中村先生いうには、幼馴染の男女の友情が、愛情に変わっていく話。その夫に別の女が現れたが、またもとのさやに収まった話、これが合体してひとつの物語になっている、という。

今季最高の寒気団がやってくる。「日本全国 雪が降る 近畿中部の大阪 少ないが降る」最近の天気予報は大げさな言い回しが多いのでは、そう思いながらも警戒、大阪は雪がゼロだった。アトリエの気温は朝2度の今季最低気温。安威川は昨日昼にワンドで薄氷、今日は本流にも氷、ただしほかほか太陽で帰るころには消えていた。

10日前の話：また、台高山脈にいる。陽が照っている、暖かい、南斜面は冬とは思えないホワリとしたかすかな風、半月前にもここへ来たが同じように暖かかった。今年は1月の半ばだというのに雪がない。去年は同じ頃だったと思うが、大阪から車を走らせながら「雪がないネエ」といっていたら、東吉野村に近づくと道路わきに白いものがではじめ、屋根に雪が見えはじめ、走るうちにまわりが白くなり、山のほうを見上げると「これは積もっていますネエ」と雪山が体感できた。今年も、この2日あとに今季最高の寒気団が日本列島を包み、いくつかの場所で雪も降らせたようだ。先日、友人との話で、信州蓼科方面にスキーをしに行ったらしいが、あの辺りでも雪がなく、雪製造機を回転させスキー場斜面に雪をまいていたらしいが、翌日の寒気団でまわりの山々もろともまっ白に雪化粧、さすが天然自然の力はすごいと感嘆していた。今頃は、あの台高山脈もいちめんの雪景色になっていることだろう。あの辺りの天気予報を見てみると、スキー場がないので積雪情報はないが、標高1500メートルで、-15度というような気温になっている。一年前に見たあの景色と同じなら、おそらく突き刺さるような霧氷が枝や幹に見られることだろう。

毎年、富山に雪かきに行く、先日まで富山でさえも雪がないのでは。積雪量はわからないが、この一週間の寒気団の状態では、1メートル、2メートル積もっているのではと期待、「期待とは失礼でも せっかく 行くのですから」異常気象現象が起こっていると色々な人がいい始めているが、寒くない冬、日本海方面で雪のない冬というニュースを目の辺りにすると、異常気象現象が突然やってきたのかと驚く。雪かきに行き始めてもう5年6年ぐらい、確実に毎年雪の量がへっている、積もっている雪の厚さが低くなってきているが、少なくとも雪はあった、もちろん今年も雪かきに行くころには雪は積もっているだろうけれど、雪国の山形や富山で雪のない正月は珍しいのではないのでしょうか。今日は寒い、この一週間は寒い、寒いといってもアトリエの温度計はpm10時で5度だ。

山を歩いていると、チッチ、ピッピ、鳥の声が聞こえる。姿を見かけることもある、動きがすばやい、目で追ってもたちまち見えなくなってしまう、声だけは聞こえる。鳥は大阪にもたくさんいる、むしろこの山よりは多いのでは、カラス、ハト、スズメ、カモは群れて一度に二十羽三十羽と飛んでいる、お馴染みのサギもウもたくさんいる。ガハクいわく、大阪のお馴染の彼らの行動は、ときたま観察している、まじかで見られるので、「何をしている 何を食っている どこで寝ている」なんて多少はわかっている。いつも思うが「名前を知っていればいいねえ、生態の知識でもあればいいねえ、もっと興味深く彼らを見て、接しられる」残念ながら、木も花も、虫も鳥も、名前をほとんど知らない、いまさら覚えられない、これは手足をもぎ取られた木偶状態でわれながら情けない。

今日はテント泊の用意をしてきた、食料に水、コンロ、ガス、鍋を用意してきた。まだ時間が早いので、林道を散歩、林道は荒れている、落石がいたるところに道路を塞いでいる、急斜面のところは崩れている、歩いているところに、コロコロ、カラカラ小石が降ってくる。水も流れている、ツララも見られるがまだまだ流れは凍ってはいない。陽が傾き始めると山の中は急に寒くなって来る、冷気をひやりと感じる。いくつかの糞を見つけた。イタチかタヌキかどなたのしょうね、木の実がいっぱい詰まったヤツ、ドロリとしたヤツ、大型動物のものは見なかった、熊さんはもう眠っている。鹿の糞はどこにでもある、たくさん増えすぎて、日本全国に丸い糞がいっぱいだ。テントを張り、中で火を炊いた、鍋をかけた、ビールがあった、寒い中だけれど何時間も歩いたあとのいっぱいビールは美味しい。火をつけるとテントの中はたちまち暖かい、野菜が美味しい、豚が美味しい、焼酎が美味しい、夜がふけた、朝までぐっすり寝た。ここは三重県との境、奈良県は都があったところ、平野部の多いところと思い込んでいたが、なかなか山深いところだ。県の北のほうに少し平らなところがあるだけで、吉野辺りから南のほうは山また山の山国、大峰も台高も十津川村も。

◎「今年初めてワカンを着けた ええと 右 左 どっちだったか 紐は あれえ ぐずぐずした 片一方はすんなりいったけれど もう一方が変なところに繋いである 脱ぎなおし もういちどいちから あれれ 家で練習しとかなくっちゃ」ワカンは去年が1年生、湿ってもぐる雪には最適だ。相変わらず杖代わりにピッケルをもっている、これはオレにあってる。◎「歩き始めて1時間 50センチから1メートルの雪 ここは滋賀と福井の県境 滋賀の方から登っている 日本海に近いここだけれど 今日は晴れている 道路標識の気温は1度だった ここら辺りは-3度ぐらいかな」今年正月が明けても雪が降らなかった、やっと降りだした、各地で雪情報を聞く。◎「ガラガラガラ 鈴の音 材料は南部鉄だとか 真冬の1月に熊でもあるまい いやいや今年の暖かさ 熊さんもおちおち寝てられないかも」<鈴、西洋ではbell the cat 猫に鈴をつける 危険なことではできない 危険なことに挑戦する英雄>◎「ラッセル交代 ワカンを着けてももぐる 30センチ50センチ もぐる」雪山の踏み跡は階段のように歩きやすい、ところが踏み跡がないと、なかなか進まない、ふみ跡をつける先頭がラッセルだ。◎「なにかの本で詠んだけれど 木は上に向かって伸びる 空に向かって葉を広げる 葉を広げるために茎をどんどん伸ばす 天に向かって葉を広げる そういう能力はすごいのだが 風・雪・水・火への対策はないらしい 雪で地面にうもれた枝 風で折れた枝 それこそ根こそぎ倒れているやつ これも自然なんだ」◎「ひとつこひとりいない この山はいつ来ても人は少ない 人がいても二三人かな 獣の足跡はたくさんある 鹿が多いネエ カモシカかも こんなところにカモシカ君いるのかネエ ヒトが歩いたあとかもしれないと思われる窪み 何日前かネエ 雪は湿った重い雪 ワカンで踏みしめるとズボリともぐる ワカンの底に団子になって付いてくる これは重い ピッケルで払いのけるが 次の一步もその次の一步も 霧氷はない 幹に枝に雪が乗っているだけ シャクナゲだと思ったら ユズリハ 初めて聞く名だ そういえば シャクナゲと違うような気がしてきた」カモシカは福井県や滋賀県にもいるらしい。アルプスでは何度か見かけた、彼らはじっとして動かない、10メートルぐらいの近さでもこちらをじっと見ている。今は獲ってはいけませんが、昔は美味とか毛皮とかで獲られていた。◎「風の通り道 こんな場所は雪が飛ばされ 歩きやすい なるほど もぐらない 汗が流れる 北風ピープーなれど 涼しくて気持ちがいい」◎「屋が近い 池までは もう一本でいけるかな 葉のない枝の上に 雪がいっぱい乗っている 照葉樹林の森 枝が右へ左へ クネクネクネ これはなんと美しい」◎「ザリガニを雪の上に置いたような足跡 50センチぐらいの大きさのザリガニを 1メートルぴよん 1メートルぴよん どうもウサギさんかな 白いヤツ 灰色のヤツ 茶色のヤツ この足跡はあちこちにあるウサギ追いし オレは美味しいと思っていた そうでないと思ったのは大人になってから」◎「おおお 池が 雪原だ あのグニヤリと曲がった木が水面の側にあった 覚えている 前回もあそこで飯を食った 青い水はない ただの雪だ あちゃ〜冬はこうなるのか まっしろけ みなさんに素晴らしい池があります きれいな池です おとぎの国のような池です モリアオガエルの卵がたくさんあります こんな話が通じないじゃありませんか」◎「池まで4時間もかかってしまった いつもの倍以上の時間だ しかも疲れた 足が重い 足が上がらない ラッセルはしんどい 雪山はこんなにてこずるものなんだ ただおもしろいよ 最高だ 楽しいネエ」昼飯は手づくり弁当、いつも食べる量より少し多めの玄米飯、梅干2個、白と黒のゴマをいれ混ぜた。野菜を幾種か炒め塩コショウ。サンドイッチも一つ作った、菜とバナナをはさんだ。なんといっても燃費が悪いと評判のオレ 休憩タイムにはいつでも口をもぐもぐさせていると言われているオレ、ひもじい思いはさせませんぞ。◎「帰りはどうしよう 今日はバス停から登ろうと思っていた いくつかの渡渉がある ながぐつでは登れない 雪の深いところは ワカンかアイゼンがいる 尾根道がいい ということで 村の手前の尾根を登りだした 雪が深ければ引き返そうと思っていたが ようやくながらも何とか池まで来れた ラッセルをたよってその踏み跡を歩けば確実に帰れる もう1時間すすんで そこから谷に下りるのはいかが 道しるべのない尾根道を降りるのはいかが 昼1時の今の雪山 確実に帰れる道を選んだ 登りは4時間 下りは3時間の予想が2時間で下れた 下りは早いネエ」◎「降りてきた 早い早い 雪のラッセル 足に来ている たいや一ど 疲れるネエ いくら山を下るとはいえ どんな山でも登り返しがある ウワワまた登りかア おぬかしになる仲間に なんのこれしき シャラクサイ どうってことないでしょう はなで笑っていたオレでしたが 今日はちょっとの登り返しを見て ウワワイやだネエと本音で思ってしまいました いやだネエ 情けないネエ」